

江戸東京 土木遺産

五街道 その2

甲州街道は日本橋を起点として西へ、内藤新宿、高井戸、府中、日野、そして甲府を経て下諏訪に至るおよそ200km(53里)の街道だ。現在、国道20号線が継承する。参勤交代で往来した藩はわずか3藩のみだったが街道筋は物流、人流の要衝路として発展した。街道の歴史をもとにしながら都内に残る2つの宿場を訪ねてみた。

甲州街道

将軍さまの避難路として生まれた街道



徳川幕府の軍事用道路!?

甲州街道は江戸城に危機が及んだ際、徳川家がこの街道を使って甲府に一時退き、さらに警護団「八王子千人同心」を従えて江戸城へ再び入城するといった軍事目的を背景に整備されたという説がある。下諏訪宿で中山道と合流するまでに38の宿場が置かれ、信濃高速藩、高島藩、飯田藩の3家が参勤交代の際に利用したが、それ以外の藩は中山道を往来した。下諏訪、江戸間は甲州街道の方が距離的に短い。甲州街道は中山道に比べ道路インフラの状況が劣悪で、街道筋の物価も高かったことから中山道を往還道として選択する藩が多かったようだ。とは言いながらも江戸市中で人気を集めた甲州街道沿いの名所旧跡を紹介する絵図等のメディアに刺激され、大衆は甲州街道を信濃の旅を楽しむメインロードとして行き来した。京都の名産品



上／明治時代末期の甲州街道（撮影：明治43年12月 所蔵：調布市郷土博物館）
下／現在の旧甲州街道（調布市）。人々が行き来していた街道は商店街へと姿を変えて、今も賑わいを見せている

である宇治茶を将軍家に献上する茶壺を運ぶ宇治採茶使の行列もこの街道を使った。1,000人を超えることもあったこの行列は街道筋の一大イベントで、通過時の田植えは禁止、煮炊きの煙も許されず、事前に入念な道路整備が命じられたという。

文：植田 波留基

内藤新宿 交通の中心地へと発展していった宿場



「バスタ新宿」
江戸期の信濃路に開かれた新宿は現在、1日1,600便以上のバスが全国300もの都市を結ぶ巨大ターミナルになっている



「新宿区立新宿歴史博物館」
内藤新宿の歴史資料とともに緻密なパノラマ模型が展示されている

東海道の難所よりきつい？

甲州街道の最初の宿場が内藤新宿だ。前号で紹介した東海道の品川宿、中山道の板橋宿、日光街道の千住宿と合わせ江戸四宿と称された。内藤新宿以外の3宿は日本橋から2里以内にあったが、かつて甲州街道の1番目の宿である高井戸までは4里の行程があった。現在の新宿界隈に鷹狩りに訪れた5代将軍綱吉が「箱根八里は馬でも越すが、越すにはつらい甲州路」という馬子唄の意味を問い質したところ、馬子は高井戸までに宿場がないことに由来すると答えた。商人たちの請願もあり、綱吉は家臣の内藤大和守重頼に対し「新しい宿場」の整備を命じた。これが1699(元禄12)年に開設された内藤新宿の起源とされている。場所は現在の四谷

四丁目交差点から新宿三丁目交差点付近までの約1kmである。

内藤新宿には旅人の寝食の場として多くの旅籠が置かれ、給仕する名目で飯盛女、茶屋女も立ち働くようになった。色町としての風情を強くしていき風紀が乱れ、開設から20年たらずで廃止となってしまった。しかし、街道インフラとしての宿場は必須だ。廃止から半世紀以上の歳月を経て内藤新宿は1772(明和9)年に再開、品川宿に比肩する賑わいを取り戻した。今ではこのエリアで内藤新宿の面影を見ることは難しいが、昨年JR新宿駅南口の甲州街道沿いに長距離バスターミナル「バスタ新宿」がオープン。300年の時を超えて新たな交通結節点がこの地に出現したことは偶然ではないだろう。

日野宿 新選組の志士たちが鍛練に励んだ宿場

甲州街道の風格を体感

都内には甲州街道の宿場跡が1つだけ残されている。1605(慶長10)年に開設された5番目の宿場、日野宿だ。現在、JR日野駅近くに日野宿本陣が東京都指定史跡、日野市指定有形文化財として公開されている。本陣、脇本陣、長屋門を構える威容を誇っていたが、1849(嘉永2)年の大火で消失、現存する建物は日野の名主である佐藤彦五郎が10年以上の歳月を費やして再興したものだ。彦五郎は敷地に隣接して佐藤道場を開いていた。後の新選組組長となる近藤勇、副長の土方歳三ら天然理心流の剣士達はその腕を磨いた拠点である。本陣の近所には市立「新選組のふるさと歴史館」があり、甲州街道、日

野宿等に関する資料があり歴史に触れることができる。国道20号線の北側を並走する日野駅から本陣に至る都道256号線、本来の甲州街道には高札場の跡地等も残り、往時の賑わいを偲ぶことができる。



都内で現存する唯一の本陣である日野宿本陣